

風土



3

降り出て雨の久女忌華やかに

（句集『竹取』より昭和三十三年作）

杉田久女は昭和二十一年一月二十一日に亡くなっています。周知のように、無季俳句を否定した虚子により「ホトトギス」を除名された日野草城・吉岡禪寺洞と共に理由もなく久女も除名されました。皮肉なことに遺句集『杉田久女句集』には虚子の悼句と序文が載っています。昭和二十七年刊行ですので桂郎師もその句集を読んでいるはず。『華やかに』に、失意の中で亡くなった久女への思いやりが見られます。

蕎麦好きの啜り音短か夕蛙

（句集『竹取』より昭和三十四年作）

酒好きの桂郎師の俳句にはお酒の句はもちろん、食べ物の句も多く、食通の桂郎師を彷彿とさせます。ちなみに昭和五十一年の「俳句研究」三月号の石川桂郎追悼文の中で、加倉井秋を氏の挙げている食べ物があります。「じゅんさい・河豚鍋・がんづけ・秋刀魚・寿司・泥鰌・田楽・鯨鍋・馬肉・鮫鱈鍋」などきりがありません。「啜り音短か」に江戸っ子桂郎師の食通ぶりが見えます。

寒 椿 い つ も 見 え ん て い つ も 見 ず

（句集『有今』より昭和五十四年作）

一月号でも椿の句を探りあげましたが、器師にとつて「椿」は大事なモチーフです。この場合は「寒椿」です。で花はそれほど多くありません。また「いつも」から毎日のように見える庭にあると思われず。この句の「いつも見えぬて」と「いつも見ず」とはなんでしょうか。「いつも見えぬて」は対象がそこにあるだけで、意識のところにまで届いていません。一方「いつも見ず」には「見る」という対象と交感する時間が隠されています。つまり「見る」ときは、対象のいのちとしっかり向き合うということなのです。器師の「いのち二つ」がここに表出されている。

凍 瀧 を 山 に 立 て か く 琴 の び と

（句集『有今』より昭和五十五年作）

これは比喩の句です。「凍瀧」を山に立てかけた「巨大な琴」と見ました。この二つを重ねると「琴」の固い質感が「凍瀧」の固さと繋がり、「琴の弦」が筋状に氷った瀧の表面をイメージさせます。大胆かつ的確な比喩と言えます。

手 応 へ
南 う み を

手 応 へ の 大 根 の 首 抜 き に け り

十 二 月 八 日 未 明 の 飛 行 灯

鴨 の 群 翔 つ や を の の く 沼 の こ る

照 り 翳 り せ は し き 冬 の さ く ら か な

ひ り ひ り と 月 の ひ か り の 冬 ざ く ら

賀茂川や鴨は中洲に鶺鴒は杭に
ジーパンで入る顔見世の楽屋口
顔見世の夜の部までをにしん蕎麦
夜の部へ襟巻婦人陸続と
にはとりの薄日つひばむクリスマス
数へ日の縄屑の嵩反故の嵩
縁側に大歳の鍬寝かせけり



竹間集

同人作品



歳の市

林 いづみ

しぐるるや息かよはせる医師と樹と
冬麗の日向ひろひぬ床払ひ
ふつふつとビーフシチューや室の花
子の手形押す羽子板も市の中
浅草の梟喫茶に取るマスク
大吉の九十九番札歳の市

つくづく冬

土井 三乙

老医師に老患者みて小春かな
冬の雨舗道に街の灯を濡らし
冬鴨や枝先の鋭き苑の木々
つくづく冬葉のなき櫛見上げては
街に遇ふ会釈の顔も十二月
甘酒も御神酒のうちに初詣
楷・行・草三体の幸筆始

大銀杏

小林 共代

大銀杏空へ黄金を展げをり
自画像のゴッホの目線冬ざるる
石路明り水琴窟に耳を貸す
師走風異人の寢墓よけて過ぐ
街騒や師走比丘尼とすれ違ふ
煤逃げに子供預かる破目になり
着脹れて己の影を踏み歩く

野鳥観察会

中根 美保

鶉が突く末枯の唐辛子
日の差せる箒目にをり冬の蠅
小半刻歩き鯛焼なほぬくし
白息をゆたかに野鳥観察会
梨の木の根方に集ひ冬の草
初鴉湖面のごとき空ありぬ
一橋をたのみに村の雪籠

冬の月

間島あきら

神さぶる水をしぼりて冬の音
谿水の絵巻解くかに鴛鴦来
しづかなる七十五年目開戦日
冬至の日コクリコ坂の信号旗
パソコンのメール消しある年の暮れ
百万の電飾統ぶる冬の月
読み返す十年日記去年今年

白万両

宮川みね子

立冬や星なきふるさとあとにして
人声の去りて柵こぼれけり
レコードの余韻まだあり冬ぬくし
冬ごもり仔犬さみしき眼もつ
大粒の雨すぐ止みぬ白万両
冬暖か両手にさげて花の鉢
新宿の高層ビル街抜け師走

去年今年

浜 福恵

堂椽の木のぬくもりや雪蛭
亡夫の齡越えて米寿の星冴ゆる
賀状書く仏間どこよりあたたかく
秒針なめらか冬至の夜の掛時計
逝く年の捨ててしまへぬ紙ばかり
五湖をゆく湖岸の道や冬萌ゆる
湖の波銀色に去年今年

山河集

同人作品



南うみを選

闇を裂き鯰起ししきりかな
鯰釣り閑人と妻の言ひ切れり
冬囲こまかきことは目をつぶり
雪起し妻のいびきに届かざる
息整へ息整へて雪降ろす

森屋 慶基

一の橋 二の橋 三の雪 蚩
石一つ置いて社や夕時雨
備忘録貼らるる茶の間十二月
兵士ゐるドブ板通り年の暮
冬浪のほどよきゆれや浮標立つ
木枯を遣き去りにして地下街に
冬落暉箱根は墨に富士は朱に
噴水の身を細くして年つまる

下山田美江

石井 秀二

後ろ手のをとこ佇む冬菜畑
空き缶を鳴らし木枯失せにけり

蔦枯れて銃眼現るる古城かな
峠より国旗の見ゆる文化の日
初雪や歩を伸ばしたる神保町
マチネーの跳ね短日の先斗町
アツハ・イツヒ発音練習息白し

遠藤道彦子

狐火を信じる人に躓きにけり
夜に入りし白菜桶の箱しまる
冬の藻を抜けむらさきの小魚群
四五人のひとり声高鮫鱈鍋
湯豆腐や耳学問のみな長寿

赤石 梨花

風土独語／南 うみを



息整へ息整へて雪降ろす

森屋 慶基

屋根の「雪降ろし」は危険な作業です。しかし降ろさなければ家が潰れます。「息整へ息整へて」の繰り返しは、足元を整えてもいるのです。体験者の緊張が掴まえた言葉です。

牡蠣啜り邪馬台国の位置きまる

豎山 道助

まず作者の想像力に感心します。「邪馬台国」の所在地はいまだに九州説と畿内説に分かれます。「牡蠣」は縄文時代から採取されています。人物たちは海に近い所を選んだのかもかもしれません。

一の橋 二の橋 三の雪蛸

下山田美江

一、二、から三の場面転換が見事です。三の橋で思わずも「雪蛸」に逢いました。その喜びが息も継がせない叙法に出ています。

顔見世の声のかすれや大向かう

渡辺 やや

「大向かう」は、棧敷の後方にある立ち見の場所です。鼯鼠の役者のせりふに耳を凝らすのですが、「かすれ」で聞こえません。「うならず」までにいかなないもどかしさが伝わりります。

冬落暉箱根は墨に富士は朱に

石井 秀一

この句は冬の落日の高低差を「箱根は墨に富士は朱に」でみごとに描きました。箱根の暗さと富士の明るさが鮮やかです。

戸口だけ残し山家の柿すだれ 高瀬志ず江

「戸口だけ残し」でこの「山家」の佇まいが一目瞭然です。俳句の基本は見えるように描くことです。「柿すだれ」が冬へ向かう「山家」の暮らしを伝えています。

アッハ・イツヒ発音練習息白し

遠藤逍遙子

ドイツ語の「アッハ・イツヒ」と吐き出すような音声で、「息白し」を増幅して濠々とした「白息」を想像させます。声に出してこの句を味わってみてください。

一世紀子のために生き枯れ果てし

島 玲子

「一世紀」から百歳まで生きたことと、ひたすら「子のため」の人生だったことが解ります。「枯れ」は本来草木に使いますが、冬されの中で、百年を使いきって肉体が枯れたと読めます。

四五人のひとり声高鮫鱈鍋

赤石 梨花

「鮫鱈」は胆をはじめ内臓がおいしく、部位によって「鮫鱈の七つ道具」と言います。この句「ひとり声高」から「鮫鱈鍋」の蘊蓄を披露している得意満面の人物が見えます。(以下略)

風土集



南うみを選

白き息吐きつつ団子坂下る 川崎

豎山道筋

長江もベルリンも雪青郵忌

長き旅おはりし母や年の暮 阿南 島 玲子
一世紀子のために生き枯れ果てし

牡蠣吸り邪馬台国の位置決まる
冬の滝気迫の水を落としけり

百年を生きて逝きけり小晦日
峰寺へ裏道険し冬いちご

焼芋をベストセラーの上に置く

宇治

渡辺やや

初春のカットグラスに青き海
大粒の酢牡蠣と噛みし柚子の種 相模原

岡 尚

煮大根の真中に一つ箸の穴
参道の脇の日だまり寒すずめ

枯蔦や屏風に洛中洛外
茶の花や磨きぬかれし太柱

煤逃げのこつそり戻る裏の木戸

住職の箒目清し実千両

顔見世の声のかすれや大向かう
日時計の冬日僅かな時刻む

みどり

高瀬志江

初雪に赤き実光り合ひにけり
老いといふ未知の道程去年今年 横浜

池田加代子

初雪や落款のごと冬紅葉
一輛は炬燵列車の予約席

大綿に逢ふ故郷の家に逢ふ
嘴を己が身に埋め浮寝鳥

戸口だけ残し山家の柿すだれ

電飾の惑はず眠り冬木立

白鳥の蔭に親鴨子がも連れ

冬至来るメキシコ産の南瓜かな